東海子まこと一義をとゝとゝのへぬ人の風雅をあるべ
し。先師義のけるゆゑんをあらはさんとこゝろざす。
毎日なる人の俳諧を強とするにあらざるものをなぶ
えざるのみなべし。一日義をとゝのへ人情のうへ
かくのごとし。後学(マナビ)まことに和(ヤハラ)ぎ入の志つまびらか
ならし。情(オモヒ)を千里のかなたに同じし。歳とゝもに都
鄙出。富の貧ど偏なるうし。主井氏の続ぎ
事を後く。志賀氏俳諧の師匠。平野の傳

夫より。松ヶ谷の新門まで。矢橋(やはし)の渡し。
瀬田へ。やまいもむし。石ばしり。
の田。山風。橋ばしり。風ぐち。
田ノ上。黒崎。そもそもの。宿名
まで。直ぐ。中山道。別れあり。西風強き
ものと。なって。字。ひろさ。かるい。又。
て。田。なまい。ちくまがり。ちくまがり。
東海道。ほうこう。道。のぼり。ほうこう。

金沢のうらさびしき。ゆうすけ。又。ゆうすけ。
名の。名。ほうこう。むつ。記。ゆ。れ。ゆすぐ。
て。苔。の。ちくぶり。濁。く。濁。く。と。馬。墓。ゆ。ゆ。の。
滝。ほ。苔。茅。茅。の。九折(つづら)。猿。蟹。中。ほ。
蜀。の。嶮。岩。膝。頭。ゆ。ゆ。ち。て。ち。る。業。捨。
ひ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。句。作。て。。大。竹。小。竹。と。ゆ。。う。。
小。ま。ん。が。ま。ち。と。。擬(ドモ)。鼻。禅。地。蔵。を。頭。く。。富。士。ぐ。
ま。ち。へ。ち。ち。あ。。。ま。ち。の。曲。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。

正風しの義の数を一筋に定めまつりて乱
るまじ。師こゝに示し給ふ曰。世に所謂の宗匠
と称する道と師法とを多く。茶名の七十とやを
くしとおぼし。俳諧の名や屋号のうつり変り
賛付おりもやう。俳諧の藏にたぐへをしへ。池
鯉鮒の宿の夏の月。市川の里の赤坂しぐ
るゝの雫。句の中にといふ。情のもる
所皆俳諧なりとぞ。

義中の分切れ自己の手覚なく。師の見解
明らかにして命の親ん。一つの詩一文を作るに
こゝろ、は情の関の戸ぬきなりて。
俳諧まこと鞭と雷なり。鞭は鞭なること地
出なり。俳諧と雷と離れて獨立し。今こゝに自己
得ることこゝろ。九月。長崎の旅に冒されて。
地の天の間を孤とす。その指さす所。蔵鉢のねぐらに。
食なりの春小雨と共に新坂を越す。俳

道一の雅伝大井川の渡人に尋ねる早今後
乃家をうしなひ[illegible]ぞ流れんと
歌句作り家づゝに門人多し中よりこの
高橋宿鍋乱指[illegible]繰自然[illegible]
まゝ渡り舟入る水さかこるふもゝぬくと
と流さるゝ[illegible]ぬ川底を見れば
沿。勝おさゝ決て衝く目をつぶるいくゝの
ハいるとゝ[illegible]言[illegible]自己吾信のうるこ

[illegible]ぬのこすぎ[illegible]。在[illegible]流まん縹
こ物ことゝ[illegible]
乃信と腸原くゝ清流[illegible]
流ちつくしぬ境を鏑[illegible]
であること大井川とゆやゝ[illegible]
こつたこと唐国[illegible]
げ。富士[illegible]
けゝねて赤人の眠と[illegible]

大井と神保伯先。何ぞ洒脱なるかむかしたる
八室の作なり。御家和あつて。蕉翁と家を富さと
なりし。勇気室書所に起臥して論ず。師の力に
執まぶ淳〳〵猥りにもとめうるむ〳〵〳〵嬉り
洲れて。格数の印稿を一句まこと裏言かの精
粗渾論とまふこと。家を察とつぶさに。師の肺肝
よりもけ入ぬのるをひ拙の〇て一つの貧根乃蓋
印拙を。二芭を秘象を相伝して。雅諧の底一

と存ぬる所なるべしの人と免許乃上で真乃自性と
なるなるべて道場道流の芭蕉門とやあるべとも
こゝ先ら〻当時義俳稽古所なる大井川ゆで出
ゆとかく〻ぶれ物る極麁乃乃よ踏まえ。ま井戸
と拙言ふ先ら〻ど。尺どり関どと江家道教をして。
俗俳乃際乃所を迎回て。彩氏乃教よとをせ。
義を粘也と立也。方俗の稽古を俗〻ゆと賞
くや極人。不仕耳ア。京生等。を弱さ月ゆ

入道と芭蕉流とも爾体と十人（トクチ）古代の賢哲と
称し凡蕉門乃一流師匠の方寸と志ざし法世乃事
乃佛法の茅毒あるれいりやうとも
等しかる俳諧よい色死生の境あると一筋
すとそなるもむい大なる加尊あるべし自他
門乃邪俳多くさくこしてて旦先（カツテカブ）と論（ヘウラン）
作と風人とぬくく新色と十人よ八の
ハまりぬ好と物の人を選乃かくのごとく遊弄

とて人を主とせ中物をなるべし集古りそい
今あれくの僧よ人をもとめとれ立を井のい名くく
俳人乃虚実を用和すに名和中あるべ実あれ
ちと常よ義あるて信仰虚乃俳士の極て義
句乃ちと俗と句多のりたくと義ある
人歌よ歌がくいるとるいと功あ波鳴をさと
色彩あるあ俗ちなや実よ俗の風土芳花亭乃行和人
ちく俳船の帆を揚業乃将来往の櫂と九（ヌキリ）ちく要乃よ波

流れ流れて深海の底に沒し深く沉んで岩の糸筋の
針ばかりの動くを芭蕉門の風雅を家とする今年の
冬の選び選び選び抜いて一集乃選び
旅立ち記号とかく作る作る夢の坊の須弥
孟達と接して此序を記す時享保六辛丑
三月幸日洛ふたゝび〳〵ふれを書

東海道卷之上

花洛　何程選

雪

雪散や神屋に花の対句　翁

ちる雪に独鈴ゆるぐ立沢の音　何程

雪ちるや行間さくく貸方　雷堂

門口の棟ふるふるや雪の世義　黄逸

すいとうと大根刻やと郭の雪　フジヨ日田　風圃

ふり雪や古義を捜して異義の　永石

初雪や藤ゐ[illegible]の内　部甫
くつきやゝ[illegible]の簾代の房小路　大素
[illegible]と[illegible]ふく繞蜜祷　群路
初雪やまゞ垢はうる滝ぞれ　素堂（ヒコ子）
初雪や溝の[illegible]わうれ田[illegible]字　艸示
初雪や例入て並れ[illegible]　丙伍（ヒコ子）
[illegible]雪[illegible]る[illegible]や[illegible]　菊阿
[illegible]れてあ[illegible]る他や雪れ雪　孟遠
[illegible]れぬき食ぬ[illegible]や夜の雪　治天

朱川すゝ年のさしうや夜の雪　越園
[illegible]ぬ[illegible]く[illegible]も[illegible]比えの雪　荘斯（ヒコ子）
沖も[illegible]れ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]の[illegible]　雷巷
[illegible]雪[illegible]ちるや[illegible]の[illegible]　孟遠
挑灯の[illegible]ぬ[illegible]　[illegible]代やとゝれ雪　[illegible]行（ヒコ子）

新仙　西嶺　何狙

初雪や朔[illegible]さげまる淀の堤
[illegible]ゆく[illegible]ゆく[illegible]　孟遠

是第は鶴が岩は待ち遠
しうしうあはれ神〻しうも　往
出代りの末たてしやぐ宵の月　仝
小夢の神しる便りうきこゝろ　を
夢まくら兎はかりの恋あうだ　仝
碑をれさうく祈づるもの年　往
此丘人日ゆゝ祈る時の口惜さ　仝
日を刺やうに江戸おが来る　を
銀光のぐれうと思ふる気味ぬ　仝

倒らうくゆくうゆ使ひ挑灯　往
孫東のあるとのつるもの出　仝
盃うう百つもしる巖滝　遠
紫金法はんで描れば飛こく　仝
かきうと釘穴おれて来る　往
花をうや業平の町を嘆ト　を
きゝれ荷持をまゝく書柳　往
所かめく詩ニうるゞる表の風　を
仲七日ゆと著を白割る　往

ふ枝を切るつゆまでぬれて清き
徴所のかまどもうち絶ぬるかな　遠
新冷のほれと跡をとゞめぬ　根
見しくもとゞまるは只こゝ石　根
秋枝の残しうゑ糞をけつまぶき　遠
雪深きまで春をまち待る　今
きぶくのろくもゆゞしぶさと　根
流てはましこけてるまゝ　遠
夕ゝ日京ゆゝしぶ世良為　今

さ仏のかゝはゝ中ゝ稲荷　根
棹の石をゝ春ぶるゝこゝ　今
市ゝ京つゝく通る廣場　遠
蝶のゝ文ゝやゝ明はの　根
こゝ地のゝるゝ此ゝ　遠
ちゝぬゝを初ゝ蓋の時ゝ　根
埃ゝる苔をつゝく燕　新

余与名

燒鄰(キヌ)しるしなる春もおしみ初けり　冶天
拂あられ白のしぶつまや神くれ　孟遠
掘あらら石のかしらやうら明け　何有
高ゆしまるる星の花ゆゑ翌くまき　杜谷(ヒコヲ)
岸岐(ギ)ふるこるのつもあつと神くれ　周昏
有法をとるかく多うけ初きを　越蘭
おろがぐまし星をとるかく去れるぶ　野明
肩衣の上ゆを原ふけ初る　丙伍
出女おゆ彩ゆる対初くれ　芸之(ヒコヲ)

五　枯や神ゆ心ゆ花ゆる所　可保
人賞お賞れるそぐら枯(ヤナギ)　何有
聞くく人ををゆるかしのる　子鴻
以脳(ギリク)入声のうらいや神無月　孟遠
木の神りの学ゆまゆ梅や神無月　隨我(ヒコヲ)
口切や中ぐ美きハ京お人　古白
そぐうく誠人の嫁入や初海苔　何有
赤男く一ゆる学ゆや初海苔　佐夫(ヒコヲ)
一口まく乾うゆる猪おやそのひ先　番堂

菜の花の袴ぬぎ捨て奥や夫婦　孟遠

老の身に引き締めぐるる秋の夜　名游

足さきに横へ寝れば中あぶる　行柱

一人ぞ寝ぬ桃灯のおうとをきろく敷き　露林

遠雲師の庭の月や明け方　治て

古瓦の枕のうこぶ千ぐるる　巳千

けしのぐく悲の年こそ初秋　行柱

鶏鳴きてしつとろかるる　光汗

雪の中ぬ鶏や雪氣色　雨伍

ぐるぐる鶏木の切株やみぞれぐる　千侯

桃乃ふるふ日影やみぞれる　保周

大木の根を抱のしやこれけり　光汗

出家の祝ひあるこそ蔦紫　丙伍

行雁ぐるぐる水中の蔦紫　孟遠

寒屋に眠る鶏ぐるぐる　素女

猿やの小猪おぐるすけぐる　朔風

鹿をまで鶏師の寒ぐる毫　之建

盛春 於御ふのまゝ　花ゝ赤
新堂 月ゝを合さんや　緑ゝ　芙逸

越ゝサバ立 初年 新宣

月一字

元食やん月のあゝ外の淀　菊阿

月明字

明月やゝんのあゝれ吐ゝ　孟遠
和吟ゝ一ゝいや月の照　黄逸
鳴ゝの新あゝやゝの月　ヒコ子 鄭義

四の切赤ゝ　月見や浜を町　何住
名月や供奇　こゝれ水澤　治天
十六夜やゝ　ぐゝる藪の素表　日田 宋山
十六夜や新月の破れ新あし　月 巳乾

住吉

垂ゝ奇も堀ゝちゝ一ゝの月　孟を
待新の二宮ゝ行ゝ月見ゝあ　胡仙
大津まで後ゝて見ゝや月のゝ　ヒニ子 吳川
あゝゝあ立ゝ　越雪

詠さんの志わぬ木蔭や冬の月　素堂
賛法の小袖ぐるみや撞き月　何丸
小坂はとしらの光や冬の月　雷牛
志めつと半ら火消やきたの月　孟遠
人の花ときらぬの光ひや撞き月　治天
毎年こ氣のかすき耳隠やおもの月　郭南
蔵しまと拾ひ捨てや撞き月　周晋
嫁入の来の二朝や冬の月　乾峰　古弘
古くるの志ふ宮の軽みや冬の月　孟遠

[illegible]一種や冬の月　何丸
雪見舟のさめく渇くや冬の月　仮名　東岳

歌仙　三吟　表裏半巻　孟遠

菅刀ふ蒲や日暮る四日の月
木立あしく角に例の一ふし　治天
ひ人目抜く石屋乃踊喰いれく　野莞
頬の赤ものじわ〳〵吹出し　遠
声とゆ作小割入耳の鞍　天
彩のる其のまぶれ土の粉　莞

ウ

京をめぐる詠歌肩おろす所なる　遠

唐音やうく様なる三室戸　天

あくるあけぼのゝ寺迄　蕊

入色はよ業平枝さしけるる　遠

二日長　卯月　げくく枝の減　天

毛氏便宜よつゝと一色　蕊

業平ひらくやゆれ学ち杉の枝　遠

谷岩すぐくまおろれ所風　天

除あるものゝうやさぐ　蕊

一番車こゝろとゝ明　遠

月涙の旅義よおの開ゝ　天

後毛くぶ毛くぶ日　蕊

三

計多遠物くゝ後八蛇ガ出　遠

あ姫花めく併の斤　天

地黄ゝ地黄のうき雑　蕊

いやぐるやゝに移ゝ明　遠

此方明十八ゝ鳴ぐき　天

業平なるゝ京の物ぐぐ　蕊

又してかなしぶる猫とうし　遠
彼岸のもめぐるうえ寒　天
お月様うらい他のせ中に　蕊
蟬（三ツ）殘（ハネ）あるこの世のむしの声　遠
蟬しめの苔るを持て浅恨　天
玉ほをめけて来もこもれる　蕊
陸くに立る方の貴ふしみ　遠
昆布叩し雑よ千名ゆく　天
お淡路を流り常よ搖ぶし　蕊

る庵といて社て芋名月あさ　遠
枝しよ面根の搖ぶる毛蟹　蕊
水元とのちうきし新よの音　執筆

余真　秋

年よりと秋も来るよきりきしの雨　稲波（執筆）
初秋や新米（ミ）の月ゆ蕎麦　何紅
蟬（ヲバ）を挽ノ四本の鼻やと名の秋　孟遠
徒者ノ腰の弄ゆやけさの蟬　李弟（日田）

関守の目を忍ぶやたての川　何紅
月中の景いとしるや天の川　孟遠
稲妻やくれぬ井堤の柳の影　十六　古弘
いかばかりあし汐行きかくるる魚　仝　星桐
四方の音やしりや木綿のたる音　治天
乳母ぶる者乃別れや唐の色　丙伍
汐騒の見くるしやや女帝老　芸之
秋の影やおやる嘆の中迄つ　孟遠
朝風や出るや思案の指も市　何紅

沖の雁やし幸味ぎいのそうぐし　之建
陣のおれ世を楽しんそうし　孟遠
延うけくあやや田苅の聲の接　竹水
いさうしく女史てうやる田苅に　何紅
朝毛塗の白髪うたし嫁の風　露林
木のぼるの上の花しし秋の風　治天
月蝕の新しうしやあきのうり　風呂
はきかしの場所の杖や紅の風　何紅
出帰やし出梅のあぐん義求橋　陸我

明ちらさ追剥ゆるや虫のこゑ　雷堂
茶に使ふ山科や虫の声　稲波
豆飯炊ながつぶかうや虫のまゝ　治天
おれぬ家の地獄ぢごくや蚤の毛　何社
井汁のきしの甲殻ぶるきと底裏ぶ　日田　只什
柱あるの板剥がしむかのさしもしぶ　孟遠
蕎麦に陽ノ二旬　雑俳
蕎麦に木奥の寒つきし多りゆ　顔候
美きく咲く孤揚ゆや菊の毛　祇園町　胡仙
分のく種のやもめや菊のくれ　舎木

月の下よ赤と南やし菊のくる　孟遠
茶は寒や情るにうはるに汁生　胡仙
関明の根ん古仏
嗜料や月ゆるにゆる茶の花　古白

花

きく水ふるかるぬ寒あると花寒　孟遠
九除うくおろくしきかのし　何社
八切しゝ八のくまと無ゆやの花のこゝ　雷堂

森羅万象うつる大地はもとより草木
作れる出る白菊やたさうの
飄萍の日なりぬるやもし蓋（みち）
濃（カナ）桂よ何のもの一茎さうと　東茂
初しれや茅がくの一さぼん　胡仙
初花や淑めの重のう岸換　兄行
丹雪路や茅屋よりまれまく重の月　俳諧
うつ見て咲るこ所がちくらふ　則竹
人の為作る唐やしれ良　孟遠

つ玄日京ふふ巴しこのからや初桜　東茂
腰弦の星子すやすや初佐九良　何和

百韻　兄根　兄行

菊かしのはめ弦やうは桜　野苑
竹簑の蓑うのぼる湯やて　孟遠
蓋の書と耳侍よ廻門ろく　分適
立つ事を却り出したと　杜客
湯揚子の資平乃蓋と松みけ

ま玉ゐ為あを先の夕月　丙伍
普門ぶ本くこゝ〇ゑ紅の風　周胥
鄙の　鳥う箱ゑ尺くめう　冶天
どんくゝゐもバ陸くまぶゐき　越霊
ゐぐそう元の美ゐくうや　玗
美あのあ万ゑ市をはあう　伍
けゝけ者をゑ遠く嗜さん　遠
三人ゑ二足乃剣をまきも　適
一をめけてきゑ川　宮

沈くゝひゝゐ出くゐ元ゑめを　光
おれるゑ本して麻をゆや　胥
清水をめゝりをうけく菓を生　行
変ひぐく帽ゑしげさん　冢
うきこゑるぐふゑ結為ゑう　書
出ゑ多ゐう弁本引さく　伍
花の氏沼氏の世界罪おく　天
注ゐ庚り　くん　燕　適
一大傘日飴者ふ烟横ゑう　宮

唐人、[illegible]くはくと雪屋
玉巻よりたゞしるす歌の心を
野の夜ゆめ[illegible]法師[illegible]
ゞかてそをとめこめ合ぬ胸[illegible]を
[illegible]代が新[illegible]似学[illegible]ると義
[illegible]の化の新を拾ひ月の陰
法ようれしゞ[illegible]雪の[illegible]
[illegible]の[illegible]追ひて
[illegible]よ美[illegible]新を[illegible]

玉行　宗遠　晋天　陶容　伍　義

正面下師匠こハゞるゆゆる
[illegible]月[illegible]めるたこのの行　元
菲[illegible]の[illegible]よ[illegible]をもさ[illegible]
ものくばは鶏[illegible]ゆ[illegible]る
[illegible]法[illegible]百[illegible]法学[illegible]あ[illegible]
めきしく上手のくりや
[illegible]ゆ[illegible]如わ[illegible]緑の身
[illegible]賀[illegible]小[illegible]法[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

行　宗遠　晋天　陶容　伍　義

形ひとくんの殿のおもかは　伍
ありうんと刺る香を添しうと　香
蕓ハしらはやたに笹おとまる　を
お幕じましいかきるがんのごと　遠
まで陽へ美元よめん　荒
りをを者もそこば井幕　容
どこ〳〵どこも使く山うめ　天
日花に茶を添ぢゆし記みと　を
いつも西よりいとやまと後陰　釘

三

むしくとと言ひ命の雨と氣身　充
森起の頭へ後仕をしもと　遠
肱風と形んで容の狂おり　茶
竹のるかをで狂く考　晋
ちつまんと加行の法のあさぢ　天
妖歩よ答くしる　容
股りの穴へ赤鞍のりを　茶
埃原ぢりに猪をる　伍
蕾のうこ乃ぬ城と解四を　釘

ほゝゑむ　義
初夏のころの芝居あるべし　適
青空より下がりつきざし　天
綾をうつす中へぼうぶらはのを　晋
取なをす仮文のかをとゝのる　遠
そこ限りなく古歌の象あり　客
そこ〳〵に家ゝにぬきる行　園
こゝ世の汚(ヨゴレ)をうとゝ人へぼうと舟　伍
深夏(ミヲ)が新しき樂屋をはる　玉

北國の俄さうとに月落く　義
深くもやうぶ年をかすん　適
上人高原ふるかゝし親　天
拾ゝめ長ぐ山を伐出す　晋
一生たゝ人の異見を屈よやを　爾
ぬゝの家屋をつゝて自ある　遠
きれぐに絶物寺れ良室く　玉
蓬様の猿と鳴ゝのけら　客
寺塚の中より竹ゝまた花のゝ　伍

老父八年ヨリ柳ヶ谷ニ
名
うりうちし蛇の子を妖れし
ものゝ如くに 踊んで 挑灯
行きもくもくとなる星を奪ひし
異ふく者れば
女房は裏中より出
初時鳥声もうぐまば
鳴るは異国さぶらひ
なるべし 此の毛は
蛇
遠
天
晋
家
客
行
義
伍

如んぐ八徳兵衛よりも六内よりも
梅の下なる蕨かぎ出り
夕月はまぐ着物と大き
亀ぶおさる猫のやうな
四星きら光が庭の知れるを
きみくしまるふ中をあがる
川をきゝ地の蓑かぶきし
行ふ蓋形の幸を蕗蕨
立さ面よびやうと重て瑞瓦

遠
遠
天
晋
行
客
伍
義
晋

命に合ふに蕎と掃寄せ　適
格の器よさはふんのうさて　遠
四ツくくうきて出かてつて　天
弁天社小の蕎き玉盤　閑
蕎を造るなのでもき　執筆

余真　春

蕎を毒ひつ蕎や初霞　野明
遠投よ先世高やうの霞　英逸

大佛に鼻のはつくく霞哉　孟遠
凍解や築地の内北信四つと　雷堂
凍とけや山の麓後の蕎畝り　郭南
注歴や仁保の蕎北洗け　冶天
子蕎ふとせごすや先の蕎麦　稲波
鶏蕎弥をはこるや蕎はみ　丙伍
孫蕎よ力とりめく稲蕎ぶ　新波 島晋
お伴に馬乃爪うの蕎う新　日 除口
麦ロすうに牛よ移尼蕎ぶ　貨匡

砌味噌もて行て見るき蕭水　孟遠

よるの雪くゝ夏屠切也梅のも　丙伍

履物ハ南ぐ志ばくや梅の花　一乗ち　西長

梅ぐゝ考に京紫ろや濃の圖る　芙逸

哉ゑる紗後の又まや梅の花　胡仙

底しゝ赤京良と見や む笑のも　治天

切石乃ぬろ付もし梅の花　義丈

梅ゑ考や天ゑ棒の榑　日田　只什

梅寺む月福ゝ考し洗後沼　孟遠

考や ちを八れ沼て 和棒 進　何仙

ゝくれ考や そ遠ゝ未ゑ考や　治天

ゝ具和原や 矢の根と考ゝ細原を　爲宵

考や 雪(キヲ)ゝ毎 義屋 ちゞゝれ　孟遠

考ゑ一 東しゞ原 線の 垂　丙伍

考八ゝを ゝてゑ ゑるまね 柳ル　芙逸

白雅ハ ま乗ぬ 柳ル　保周

ゑゞ考の人を 推 ゑる 柳ル　治天

木 落 ゑ ゝ ゝ ゝ ゝ ゑる 柳ル　雷垂

一むね暮るゝ合に柳かな　張會
大柄杓取てくまるゝ柳かな　羽路
傘おの日あしを現く柳かな　何狂
雷もしばらく出合柳かな　越蘭
嫁姑そばよ寝てふすゞしさに　乍游
西はやゝいくしんみく見坊之客　治天
江戸へ訪ねるゝお祖母や夢許お　ヒコ子　有楷
出代父入や縁の下さぐれかな茶碗　野菀
やぶ入や深く絹買へ人さまよ出す　何狂

夕限乃出代父入淋やゝ夕日親　西也
やぶ入や仏檀灯ん親おろ　孟遠
出思うんまねさみや猫の恋　治天
香のぬけぬ辛味大根や鮎の色　英逸
腐るとは思ふ坂の胡蝶かな　畠　虎口
うけ給ひや一段よするかるの肩　戯作女　かち女
うけ口ゆし置をこゝをせうる橋柱　野路
裾もたむ稲荷の神篠や春の風　佐丘
吾れやるの菱縁の川原紙に　何狂

奈良すえは高くのぼれど彼岸は　重之
ちまたの花の世人や彼岸桜　英逸
桜さんぬきや色合より深しこの大　治天
四条半ばにの立ちてやあ　赤橋　雷重
桜ちるや東のうらにあぐる色の色　丙伍女　ちき女
人世哉や第ようかぶる重の波　有橋
百姓うみよりやなくうしをぶ　雷重
雲雀たりく下よりは四のうりは　英逸
雲もうらく春あとの花のくりかひとと　孟遠

競るの木延物くい蔦うの蔦　英逸
切りしいてぶるの蔦はあぶ　何有
蔦くみが蔦女かるやまの雨　保周
蔦子木れ形を蔦るや吉れ蔦　義丈
消蔦のぬくあかり減やまのあん　胡仙
亦蔦の蔦れ夜蔦やまの雨　旅華
春雨やまぶ蔦人ちまやう蔦　孟遠
おあぐむ大うあるやまの雨　英逸
蔦のりぬ女の形やまの春れ雨　何有

出代りの夏はぎ結めしとかや　　孟遠
出かいつもやをかくるする比枝をこえ　　太素
ひばよりまぢかう七星ふかう卯　　西長
青あらん桃のはうるや桑ふ宮　　独明
春ひせぬ桑ぬをのうや桃の花　　美遠
桃ちらやをうみの色華の深り紙　　風岡
赤瓦の苔う曉こうをうの花　　瓦谷
塩釜の出れ沖ふあるや帰雁　　治夫
人間の行方の知やの雁　　孟遠

下駄ちらく行傾城や菜種花　　黄遠
青菜はいるや青うう遠入高ちく何　　何柱
青菜のまるや蕪ふ足色ひの稿ち　　部甫
青菜の苔ふ照白鳥や蛙行方　　孟遠
初ちうちをさうちうをく菜摘ぶ　　何柱
行のうの国ふの塩や新菜摘　　栗茂
豆腐の義ふの荷ひ色菜ほうぶ　　風曼
宇治へ月かるる茶ちや茶の花　　孟遠
宇治新の碎をを碎ぬぢの花　　何柱

茶屋にて田舎とりやいて
茶屋の乳をと

見渡す方法はなくこや春の花　何往奴僕　鉄平

巡礼の車やとまるに茶を乞ん　黄逸

りうとやそ子宝ぎまぬ絵の地　何仁

生姿の味ぬぼゆるや春のくれ　孟遠

行春にたしぶみの羽と射さるや　素丸

歌仙　三吹

春ふかしこのうぐいすのうたけ　黄逸

鶯行うぐいす春をしのぶてまく　孟遠

九分五厘茶瓶とたばるまきく　雷也

痛うまぎ神子痛のにあく　逸

かいなるものなみ宝の母　也

そめて辛勾ふるそ兎竹　堂

木犀の匂ひ清よすこ絶く　逸

青ざめるまじとし人も城さび　遠

一うげ猪に狩猪の紅涙を　也

猛不ぐ春くとくとる粥何　逸

毒虫に似たる蟲の限極遠し
蛇もけだし元来かくの
月のまよに清らかに
似て草の出たげぬる
乃北まくらぐるの沖越く
能れく和しの蒔まで
鮮やかに夫氣よ義の筋を
江戸の例しめるし田の時
京師北まるし端をく

遠
岸
逸
遠
堂
逸

伊勢の芋ふかくし
小二階よりうぐの蛙をせし俤
ゐ傳ゐけの師方のひき
待時よ明しくりわけ
関所も過しのぼる姫ふん
おろかなるいづ毎からが消氣
草に乱れ抗ふ意義
岡毫入流やうにぬるれと
中ゆきうゐまるよ

遠
岸
逸
遠
堂
逸
遠
堂
逸

紫麦の横町とすがの夜　遠
十月の風ハ[illegible]おるふるさと　光
[illegible]れを[illegible]　逸
[illegible]　遠
[illegible]の[illegible]　光
[illegible]の[illegible]　逸
遠こばしも[illegible]根とおもふ　光
[illegible]の[illegible]　[illegible]

杜鵑

一枝も[illegible]やあ[illegible]や[illegible]　雷雷
[illegible]ハ[illegible]　英逸
[illegible]　何仁
[illegible]　孟遠
[illegible]や　杜鵑
みやこの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

京よりおくり来るるやうやく来れる　菊
見うしまうしまうす都のほうきたる　文州
白はと夜立のやうに京より出る　菊河

七十二候の味　孟遠

葉ぶしの相れ出ふくやうくらん　雷堂
唐黍こうはけも咲れ残る　何紅
法のたふ只嘗ぬぐ黍ぬく　西長
華のあ盛　傳よ物くちうし

おくくと京の塚の雪の筋を　堂
指くうあ　法の　夕月　牡
大関ようなうの神味　長
出来おぢも幸の菊　遠
草枯くあ素神を物語　牡
法の海も高よ刺ろ　堂
咲れく元めくの逆　遠
小判ど邪ど咲る黄元　長
さくくれの法家牧の角く　堂

瀧の神を仕粮(ハウ)と生ずる
ごつまし新米の薬力　長
竈の花とちるは　緒　遠
ふる明よお窟(ムロ)に仕巳初の春　堂
ひくれる士(ヒト)ふとは春　也
一四(ヒトヨツ)揚げ流よ皐雨(サミダレ)く　遠
ぬ〻しかふきの夢(ユメ)　堂
ふと人(メン)ち揚よ花の数うと　狂
部高面ちし生ずる　法ずくん　也

富士お生ず泉水の実ゲ公て　堂
例(ニテ)ても拵流やめを拵銀　遠
極楽よ鶴舞ふんのうき異び　長
蓑ずくく星ちる星　狂
砂の定型ちく蟹とせつ年　遠
進(ネテ)解ずかさに茶ちる庵(ミヤ)前　也
やしうしち流く蓑に頁鶴要　狂
蓑れぬ山ふんの扇の神義　堂
ぬめち生く殿方師よ紀ちる生のち　也

又も敵のそばへ神風　遠
合力れ来る味方の命もみとく　也
栗毛（クリゲ）の駒（コマ）に乗り廣き野を　狂
先陣を伐る義経の別て上手　遠
数多の敵を伐て伏命日　長
鞍中の考ら法ゑる合の文　狂
押破そばへく折る剣力　遠
糸巻に加き交ゑる多喰赤　也
焔炉（ほのほ）の中の歌　和の宮　堂

一番の嘴（くちばし）田の隠義つぐさ　遠
竹拍竹の義ことゑ出れ　狂
屋陣より彩（いろど）り迎不面ゑ　堂
小鳥（ことり）の鳴くに月も義ゑ　遠
要所の弁月も合れ衛宮　狂
持佛堂（じぶつどう）の名ゆく　堂
屋根乃宮（やねのみや）雀の義ゑ　長
小き日（ひ）の如（ごと）ゑ　狂
嶽（だけ）榊（さかき）木義（きぎ）ゑ　遠

彼世界を尚テ天世界を色
佐小〻と云こゝ新宮 紀 長
鉦（カネ）の鳴るく踊りの人〻 狂
代宣〻天下国家の論を上ケ 堂
機織り白を延ル 長秋 長
龍（ゴン）こゝ蛇蓋（カヤ）尾くねる小の如く 狂
金利を生ル喜を印ず知る 堂
的あるもしく市の高き立 遠
地震の雲に乗るや 狂
也 堂

苦ル此世界雪霜の如く
好きものはきの何茶の院 遠
お法と家母が歌ひ踊り 狂
且那の苦をくるる涙と実ず 堂
又〻て飛ぶ嘶ある義の捷 遠
清命清し仏像白とりける 長
毒を毒て和り雪とどろとし 堂
猛きに下次 山のかこ鳴び 遠
業（ナミ）雲（ガラ）をうばく座敷の面うと 狂
堂

松雲神社の深雪川底　長
負籠の風屋の内素元　枉
挑灯の下に傳とく　遠
出汐の長しゆかぬ海苔の色　堂
彩色もの〳〵嫁入凍解　執筆

余興　七夕

西の空に氣樹の上に更衣　風園
廣出汐かな家服や更衣　隨我

人新妻の移り香や更衣　永
庚戌〳〵服〳〳〳〳牡丹　豊前　方翠
簫入音の節れ落さる白牡丹　菊阿
鬱者づうり梅の花咲　孟遠
藻乃に井向く雪切や五位の声　何枉
見ぬ江戸の雪見て寒し初鰹　古白
初の花日見て〳〳信濃の雪の松　冶天
初の雲や義経おぐる紅甲冑　何枉
初の雲や小夜衣の海ひたる　雷堂
　　烏宵

芝よりちらや秋の月洩れ漏れ　冶天
盥栗数やしるしるとのぶるまき栗　風岡
吹数しれ居出やけし　富　何れ

椽栄し木れ風の素侍屋
斜　屋と遠して

壺皿の揚げ侍やゆ　卵　茄子　孟遠
飯供沸よ志て　魚肴や茶茶　丙伍
麻もまじる志のしけや　星糸　呉川
乳衣るものもや田紙の素侍屋　古白
精壹の志侍ゆ　陀る粉舟糸　日良

大雨とぐる蕪ゆ粉ゆ　孟遠
志て糸る漏よ蕪ゆ粉ゆ　糸志
女房北辛を遊ゆ粉ゆ　悌比
牧の声や壹乃門田れ茂屋　冶天
世の戸や火の志のか糸粉屋の袖　香風
屋ふれ地を志の粉屋や表屋越　古白
地雷ゆ志や六日れ懸竹　孟遠
竹ーゆ雷や星ゆ粉の去ぐる　隨我
竹畢　竹栗れ志れ出ゆる粉の色　舎云

八京よりあ拾の月や五月雨　丙伍
ゆ情し減次拾の月雲や五月雨　日田　文秋
新宮の清望や多し　二両　古白
酩ゞ半ば事も汐詰や五月雨　孟遠
河中ふちより交る　清小少　丙伍
生業の二条通や雲の月　何柱
二畳書の汐ゝ中の雲　朔仮
小鹿浪乃豪れ秘密や初ゝ氏　鶴峰
抱く東畳の乳母や初ゝ氏　何柱

拾ゝ清ゝの詰ゆく麻起歌　左勝
夕鳥や八畳小れすゆ汁　ゝ
ゝれゝる謂修蝶や多ゝみ　風石
ゝ松ゞ蝶乃河れ涼みゝ　左勝
毋親ゝ麻ゝ涼ゝ　何柱
月々ゝ　遠入ゝ殿の涼ゝ　孟遠
枝ゝゝ雲ゝ　風石
丹ゝ月ゝ板乃江戸結れ雲ゝ　里柏
蓙地ゝ清ゝ蝶の月ゝ　左京

[illegible]と心をも砕く　孟遠
[illegible]やうるはの川さえて　何紅
[illegible]日は松原[illegible]　孟遠
[illegible]も山もまさる小春哉　冶天

[illegible]も只一葉のひとり[illegible]
[illegible]師[illegible]の[illegible]れ[illegible]る一ッ[illegible]と
[illegible]

一ッ葉や竹のよれ世を驚ん　孟遠
[illegible]と秋の来るを這ふ蛍　孟遠
何紅
何紀

時[illegible]年六月十二日吉日

元禄三年七月吉日

本閑[illegible]